『狗張子』注釈(一)

江本　裕

本注釈は、大妻女子大学大学院（修士・博士課程）の近世専攻の院生を中心に輪読してきたものを基にしたものである。そのメンバーは荒川江里子（平成十年三月修了）、黒木千穂子（博士課程二年）、合瀬純華（博士課程三年）、土屋順子（平成二年修士修了・現本学非常勤講師）の四名で、各人の礎稿を討議し、最終的に江本が閲読した。従って最終的な文責は江本にある。

今回は第一巻だけであるが、『狗張子』には多くの問題が存すると推測され、以後も逐次検証していく予定である。なお目録は巻頭部に総目録（第一～第七巻）が付されているが、今回は第一巻のみを載せた。

凡　例

一　底本には、便宜、大妻女子大学所蔵の後印本を用いた。

一　校訂にあたっては、原本の面目をできる限り保てるようにつとめたが、通読の便を考慮して、次の方針に従った。

イ　本文に適宜段落を設けた。

ロ　句読点は極力原文の調子を生かすようにつとめたが、若干私に改めたところもある。

ハ　漢字については、常用漢字表にあるものは、原則として現在通行の字体に改めた。残した略字体・異体字のうち、必要と思われるのは後注に典拠を示した。その際『節用集』『下学集』等の古辞書を利用した。

ニ　仮名遣い・漢字の振り仮名は原文の通りにし、著しく通則からはずれているものは後注に記した。また、原文には無いが必要と思われる振り仮名を〈　〉に入れて補った。

ホ　仮名の清濁は私に補正した。

ヘ　誤字・誤刻・衍字と認められるものも原文通りに示し、後注でその旨を記した。

ト　挿絵は省略した。

一　後注は簡潔を旨とした。なお、後注の引用文は読みやすい便を図り、原表記に従っていないところがある。

一　出典の略称

イ　節用集は原則として「易林本」「書言字考」等とした。

ロ　その他の資料は各話の初出箇所で正式名称を記し、以後は適宜略称を用いた。

一　末尾に既出の典拠を記し、他に気付いたものがあった場合はこれを加えた。なお中国の作品で、典拠と指摘されているものに限り、簡単な粗筋を付した。本文における略称の詳細は以下の通りである。

〈山口〉 …山口剛『怪談名作集』（『日本名著全集』日本名著全集刊行会、昭和2・10）解説。
〈麻生〉 …麻生磯次『江戸文学と支那文学』（三省堂、昭和21・8）初出。（再版以後『江戸文学と中国文学』と改題）。
〈富士1〉…富士昭雄「浅井了意の方法―狗張子の典拠を中心に―」（『名古屋大学教養部紀要』10、昭和42・3）。
〈富士2〉…富士昭雄「伽婢子と狗張子」（『国語と国文学』昭和46・10）。

狗張子序

洛陽*本性寺の了意*大徳は、きはめて博識強記にして特に*文思の才に富り。*生平の*著述はなはだ多し。晩年に及で筆力ますノ〳〵老健なり。去年*庚午の春、往に編集せる伽婢子の遺せるを拾ひ、漏たるを捜りて、狗張子若干巻を作り、その続集に擬んとす。其年の冬に至り、既に七巻を撰び輯む。翌年*辛未の元旦、意らざるに遽然として寂を示す。都鄙驚歎して深くその才を惜む。顧に凡そ人の*常情、その徳義を哀慕すといへども、幽明途殊にして復みるべからざれば、かならずその生平の文字筆墨を尋て*面晤に換るのみ。

それ此書は了意大徳晩年思ひを究め精を研きて筆作せる真跡にして、是実に大徳遺訓の形見なるをや。是故に今その真跡一字もあらためず、梓にちりばめ世に行ふ。凡此書の作、みな本朝の奇事近代の異聞、その*文詞の富華に旨趣の深奥なる、読もの細かに翫ばゝ、唯其見聞を広し談話を資るのみにあらず。兼て勧善懲悪の益あらんといふ。

元禄四年辛未十一月日　*義端謹序

林氏九兵衛　堂会文

○本性寺　了意が住持していた、洛陽白山通菊本町（現左京区大菊町）にあった真宗東派正願寺内に「紙寺号」として許された寺号。了意が息子の了山に正願寺を譲ったあと用いた号で、了意が筆号によく用いた（野間光辰氏「了意追跡」『近世作家伝攷』所収）。　○大徳　高徳の僧侶への呼称。　○文思　文章を作する際の思慮。　○生平　「平生」（へいぜい）に同じ。　○著述　了意の著作は、仮名草子・仏書・地誌・注釈書等を合せて、およそ六十作と推定される。　○庚午　元禄三年　○若干　一定の量、また数量の多いこと。「若干　ソコバク、又尒許・許多・居多」（『合類節用集』）　○辛未　元禄四年。なお元禄四年元旦死去の記述は、了意没年時の有力な証言となっている。　○常情　ごく普通の人情。「其ノ常情ヲ伝フ、言ヲ伝フルノ人、但其ノ平常朴実頭ノ説話ヲ伝フベキコトヲ謂フ」（『荘子鬳斎口義』「人間世」）。　○面晤　対面すること。　○文詞の富華に旨趣の深奥なる　文章がすばらしく内容がきわめられていることを指す。　○義端　林義端。通称九兵衛、号文会堂。伊藤仁斎門下で儒を学び、京都東洞院夷川上ル町に住し書肆を経営、『玉櫛笥』（元禄九年刊）『玉箒木』（同九年刊）の浮世草子をものした。正徳元年没、享年四十九歳（中嶋隆氏「林文会堂義端年譜稿」、『初期浮世草子の展開』所収）。

【余説】本序は、浅井了意に『伽婢子』の続編たる『狗張子』の遺作があり、これを上梓することを記すのが主旨であるが、了意の文才を最大限称揚し、その遺作に全く私意を加えていないことを強調する処に特徴を持つ。

狗はり子序

あめつちひらけ初まりしよりこのかた、人その中に生れて、時うつり年あらたまり、後に生れし人は、わが見ぬ世の事を昔といふならし。昔もその時は今ぞかし。*今をすぎて生れし人は今をもまた昔といふべし。むかしと今とさらにかはる所なし。月日星のめぐり、雨露のうるほひ、山はたかく海はふかし、松の葉のほそく蓮の葉のまろき、鳥けだもの*昆虫、色も声も水も火も、只いにしへにたがふことなし。

久しきをつたふるには、かすかにしてこまやかならず。ちかきをつたふるには正しくしてつまびらかなり。をろかなるは聞てまどひ、見

ぬをうたがふ。かしこきは心におさめ、本をあきらめ、*鳥の跡にのこして、教をたれ、いましめとす。千代よろづ世にわたりて絶ることなし。されどもひろきあめがしたにかたりうしなひしるしのこせる種々、かぎりしられず。今わづかに聞おぼえし事もあるに、心にのみこめて*思ふ事いはぬも、むねふくるゝ心ちして、手なれし*狗はりこにむかひともし火と影とかたりなぐさむも、友とするにすくなからずや。

元禄三年かのえ午むつきの十五日

洛本性寺昭儀坊沙門了意　了　松之部

○今をすぎて生れし人　現時点よりあとに生まれた人。　○昆虫　昆虫類。○鳥の跡　筆跡・文字。中国の古代黄帝の時、蒼頡が鳥の足跡を見て文字を創ったという伝承による（『説文解字』叙）。　○思ふ事いはぬもむねふくるゝ　「おぼしき事いはぬは、腹ふくるゝわざなれば」（『徒然草』一九）による行文。　○狗はりこ　犬張子。犬の形状を模した張子の置き物。魔物を退け子供を守ると信ぜられていたので、産室で嬰児の枕頭に置いたり、幼児の玩具ともなった。これを書名とした背景には、「只児女の聞をおどろかし、おのづから正道におもむくひとつの補」（『伽婢子』序）が意識されていると考えられる。

【余説】右序文は了意なじみの読者なら一種の異和感を持たれるだろう。文章全体が観念的で具象性を欠き、時間（歴史）の悠久に思いをはせているように見えるが、仏教的諦念の吐露とも考えられる。前出義端序との文調の違いもおおいがたく、如上の文を了意晩年の心境と捉えてよいのか、あるいは別の考え方があるのか、本文読解を通してじっくり考えたい。

狗張子惣目録

第一巻

序

三保の仙境

由井源蔵足柄山に入事

鳥岡弥次郎富士垢離付常陸坊海尊が事

守江の海中の亡魂

島村蟹の事

北条甚五郎出家付冥途物語の事

狗はり子巻之一

○三保の仙境

*駿河の国宇渡の郡*三保の松原は地景めでたき名所なり。北のかたは*富士のたかね雲を凌ぎ、空にそびえて幾千丈とも知がたし。頂には*小々竹生たり。蒸のぼる煙はその色青く、山の腰より下つかたには小松のおひてつねに緑なり。*鹿子まだらに降つむ雪は、春夏ともにきゆる時なし。*浅間大ぼさつのすみ給ふところ、もろこしよりは此山を、*ほう莱山と名づくとかや。

万葉集山部赤人の歌に、

*ふじのねにふりつむ雪はみなづきの
　もちにけぬればその夜降けり

みなみのかたは、あら海なり。西は*宇渡の山千手観音の霊地なり。*田子の入海*蘆高山*清見が関も遠からず。釣する海郎の夜もすがら、浪をこがせるいさり火の影、岩ねにかゝるしら波、*尾上にわたるゆふ嵐、汀にあそぶ*鴎鳥、水にむれいるありさま、草むらにすむ虫の音までも、とり〳〵にあはれなり。

新古今集越前が歌に、

*沖つかぜ夜寒になれや田子の浦
　海士のもしほ火たきまさるらん

三保の松原は西よりひがしへ、海中にさし出たる事四十余町なり。*古しへ*天女のあまくだりて、羽衣を松の枝にかけてさらしけるを、

*漁父これをひろひて返さゞりければ、天女ちからなくすなどりの妻となり、年へてのちに羽衣を返しければ、天女よろこびていふやう、妻となり夫となるも、さきの世に少の縁あるゆへなり。今は是までなり。我は天上に帰るべしとて、仙人の道をこまゞ〳〵とをしへて、天女は雲ぢにのぼりけり。すなどりは名ごりをおしみながら、道をつとめおこなひ得て、つゐに仙人となり、富士*足柄のあひだに行かよひ、猶今の世までも折々は人にまみゆ。よはひもかたふかず、かぎりしられぬ命をたもちけると也。

能因法師が歌に、

*宇度浜にあまの*羽衣昔きて
　ふりけん袖やけふのはふり子

とよみしは此事なり。

○**駿河国宇度の郡**　現静岡県静岡市東部。郡名は、郡域が宇度山を取り巻くように位置している事に由来する。　○**三保の松原**　（現清水市）。駿河湾側の平滑な礫浜の上に載る砂丘上の松林。そのほぼ中央に式内御穂神社があり、社前の黒松は「羽衣の松」として有名。　○**富士**　平安初期に都良香の「富士山記」（『本朝文粋』十二）が書かれて以来、『竹取物語』の重要な素材となるなど、富士山に神仙が住むという伝説が生まれた。「……行旅之人数日ヲ経歴シテ乃チ其ノ下ヲ過ギテ之ヲ去リテ顧望ルニ猶山下ニ在ルハ蓋シ神仙之遊ビ萃ル所也」（『和漢三才図会』五十六）。　○**小々竹**　篠、笹に同じ。「くまざさ」など、群生して丈の高くない竹の種類。神霊を媒介する依代として、古くから神事に用いられていた。　○**鹿の子まだら**　「時知らぬ山は富士の嶺いつかとて鹿の子まだらに雪のふるらん」（『伊勢物語』九）をふまえる。　○**浅間大菩薩**　駿河国一宮（現富士宮市宮町）に鎮座する、富士山の信仰から生まれた神社。祭神は木花開耶姫。中世には仏教と習合して浅間大菩薩と称され、本地を大日如来とした。近世期には富士信仰の講が多く作られ、六月には富士詣でにぎわった。　○**ほう莱山**　神仙が住むと云われる架空の島。「義楚六帖ニ曰ク、日本国、倭国ト名ヅク。東海中ニアリ。秦ノ時徐福五百ノ童男、五百ノ童女ヲ将イテ此ノ国ニ止マル。東北千餘里ニ山アリ。富士ト名ヅク。亦蓬莱ト名ヅク。其ノ山峻ニシテ三面ハ海。一朶上ニ聳ユ。頂ニ火烟アリ徐福此ニ止ッテ蓬莱ト名ヅク」（『本朝神社考』五、『丙辰紀行』）　○**ふじのねに**　初出は万葉集三―320。『歌枕名寄』等にも見える（ただし二句目は「降り置く雪は」）。『東海道名所記』二に所収。　○**宇度の山**　有度山のこと。現静岡市の南東。静岡、清水両市にまたがる。標高約三〇七メートル。富士山、三保の松原、駿河湾、伊豆半島が一望できる。「この山の状を見るに、海岸弧絶の所にて、観音老人堅座の地なれば、補陀落山とも申なり」（『丙辰紀行』）　○**田子の入海**　田子の浦。静岡県東部、富士南麓の駿河湾に面する海岸一帯。白砂青松が連なり富士山が影を落とす景勝地として著名。　○**蘆高山**　足高、愛鷹などとも表記。富士山の東南東に位置する連峰の一つ。標高約一一八八メートル。「富士山ノ東ニ在リ。昔ハ行人富士ト足高ノ間ヲ通リ、関在リ。横走ノ関ト名ヅク。」（『和漢三才図会』六十九）　○**清見が関**　現清水市にある清見寺がその跡地か。東海道の歌枕として著名。興津の西の外れに位置し、前面は海、背後に険しい薩埵山があり、関を設けるには絶好の地であった。鎌倉時代以降は名ばかりで、関としての機能は失われた。　○**尾上**　「Vonoye 詩歌語。一層高い山へと次第に連なっている小山や山並みの稜線」（日葡辞書）　○**鴫鳥**　「かもめとり」（鷗のこと）の誤りか。　○**沖つかぜ**　『新古今和歌集』雑中。『歌枕名寄』『類字名所和歌集』にも所収。　○**古へ天女のあまくだりて**　【余説】参照。　○**天女**　天上界に住む女人。仏教では色界以上の世界では男女の区別は無いとされるが、通常は美女と考えられている。中国神仙思想に基づく仙人や神女に属する天女もあり、本話の結末にも影響が感じられる。　○**漁父**　「漁人　すなどり　漁人」（『新刊節用集大全』）　○**仙人の道**　仙人は飛行など超人的能力を身に付け、俗界から隔絶した境地にあって長生不死を保つとされる人。仙人になるには、仙薬、調息、養生、尸解など様々な方法がある。羽衣伝説の諸話の中で、男に仙道を教えたとするのは、本話以外に見えない。　○**足柄**　相模国と駿河国にわたる山々の名称。（現南足柄市・足柄下郡箱根町・静岡県駿東郡小山町の境）。東海道の要所。「足柄峠辺の諸嶽を括称して足柄山と呼べり」（『新編相模国風土記稿』十二）。　○**宇土浜に**　『後拾遺和歌集』雑六。『能因法師集』『袖中抄』『歌枕名

寄』『類字名所和歌集』等。能因法師のこの歌は、羽衣伝説を取り上げる記事に多く引用されている。「はふり子」（祝子）は巫女。　○**羽衣**　振り仮名「えころも」は「はころも」の誤刻。

【余説】富士山に神仙が住むという記事は、『本朝文粋』十二、林羅山『丙辰紀行』、『本朝神社考』五等に見られる。富士山を蓬莱山と見て、仙境視する記事は、徐福が富士山を蓬莱山と名付けたという伝承に基づくと考えられるが、管見の範囲では三保の松原を仙境としている記事は見あたらない。関敬吾氏『昔話の歴史』（関敬吾著作集二）は、日本の羽衣伝説を始祖誕生型・氏神型・離別型・再会型・幸福な結婚型・養女型・難題求婚型・笛吹婿型の八種類に分類する。三保の松原には神社があり、氏神型の伝承の気もあるが、離別型と再会型の中間か。

【出典】『本朝神社考』五「三保」〈富士2〉。

了意は、『東海道名所記』において、本話を構成する要素の殆どを使用しているが、羽衣伝説部分の男の登仙がなく、直接の典拠は『本朝神社考』と考えられる。『丙辰紀行』にも関連記事がある。

○足柄山

過にしころ、*興津といふ所に*由井源蔵とて、そのかみは*鎌倉伺公の人の末なり。時世につけて家もをとろへてすみけり。おなじ友だちに*藤山兵次、*浦安又五郎、*神原四郎とて、いづれも年わかくて*友なひけり。

古き人の物がたりに、*富士足柄の山にはむかしより仙人ありて、心ざしふかき人には出逢て物がたりして、をかしき奇特もありといふ。四人是を聞て、いざや我ら山に入ておこなひ、その仙人にあふて長生の道を得ばやとて、うちつれて*足柄山にわけ入つ、、深き岩屋をすみかとし、峯にのぼり谷にくだり、蔦をまとひ苔をしき、はだえを雪霜にさらし、骨を嵐にまかせ、*霞を吸ひ呪をとなへ、*夜る昼三とせをかさぬれども露ばかりもしるしなし。

神原四郎はわづらひ出して里に帰る。藤山、浦安いひけるやう、家を忘れ欲をすて、身をかへりみずおこなふて三年になれども、すこしのしるしもなし。あたらとし月を空しく暮して老はてんより、故郷に帰りていかならん君にもつかへ、身をたて家をおこし栄花の春に逢べし。目にもみず、あて所なきおこなひに、骨をるほどに君につかへなば、あがるまじき身にもあらず。無用の*長生不死いまさら望むも詮なしとて、故郷へぞ帰りける。

由井源蔵は、此みとせおこなふ仙の道も*神君の*意に叶はねばこそしるしもなけれ。かくうたがひのあらんには、たとひいくとせ行なふとも更にしるしはあるべからず。われは命をかぎりに、うたがひなくおこなはんとて、たゞわれ一人山にとゞまり、いよ〳〵*修練精行せしかば、神仙あらはれて、*丹薬秘術をつたへ、つゐに大道をさとりけり。

故郷に帰りし三人は、知行につきてつとめしに、家をおこし身をたて*奉行*頭人に経あがり、世のもてなし、人のほむる栄花ひらけてめでたかりけり。ある時、三人いとまの隙に*三保が崎に出て磯ちかくあそびゐたるに、ひとつの小舟をこぎて、その前を過る。*海郎の世わたる釣舟かとみれば、それにはあらで、舟の中には蓑笠着たる老人あり。棹をならしてゆく。そのはやき事風のごとし。三人これを見る。まさしく由井源蔵なり。声をあげてよび返し、扨も久しく逢ざりしあひだに、和君は独り山にとゞまりて、おほくの年をかさねながら、浅ましくをとろへ何の甲斐あることもなし。*それ風はつなぐべからず、影はとらゆべからず。ゆくゑなき事に、二たび帰らぬ年をつみて、老はて給ふ残りおほさよ。我ら三人は故郷に帰り、君につかへて奉行頭人となり、世におそれられ人にうやまはれ、妻をむかへ家もさかえてたのしみおほし。源蔵は今その有さまにて、さこそ物ごと心にも叶まじ。何にても不足の事は、我ら調のへてまいらすべしといふ。

源蔵うちわらひて、君はうかび我は沈めり。魚鳥といへども、それ

〳〵心にかなふ道あり。世に用ゆる所の物は、ほど〳〵につけて、事かけず。此山のあなた苔のしたみちに、桃の園桜の林あり。その門の内ぞわがすむ庵りなる。見ぐるしけれど、いざ来て見給へと、三保が崎より足柄山にわたりて、四人うちつれて峯をこえ谷をわたるに、一むら立たる*桃桜の林のすゑに、あやしげなる門あり。

内に入ければ*荊茅はら道もなし。一町ばかりを行に大門あり。楼閣重々、*玉の甍、虹の梁、道のかたはらには翠の竹、さすがに高からず。青葉の間に白雲あり。風ふき来れば枝かたふきて、*糸竹のしらべひゞきに聞え、楼門の内には見もなれぬ花の木、名もしらぬ草の花、ふかみどり浅むらさき赤き白き咲つゞきたるよそをひ、更に人間のさかひにあらず。匂ひ四方にかほりみちて、たましゐさはやかに、心たゞへう〳〵として雲にのぼる思ひあり。内に入て庭のおもてを見わたせば、うえ木のこずゑには*五色の鳥とびかけり、さえづる声のおもしろさは此世の物とも思はれず。*迦陵孔雀の鳴に似たり。池の内には清き水たゝえて、*金しろ銀の鱗、をよぎめぐり浮しづみあそぶもめづらし。ならびたる木のえだに、*赤き栗、緑の棗、大きなるは三二寸に及べり。しきわたしたる真砂、立ならびたる岩ほのあひだより、静に水の流れたるも、さはがしからずぞみえたる。

かくて見めぐるあひだに、髪*からわにあげたる童二人出て、こなたへとて、よびいれたり。書院の内には、かざれる棚には琴瑟笛、筝の*をりこと、香爐香合、*西湖の壺、*蜀江の錦をつゝみとし、真紅の緒にて結びたり。*曲禄の上には豹の皮をかけ、床に三幅一対の*唐絵をかけたり。暫くありて由井源蔵そのさまけだかく出たち、三人にむかひて礼義たゞしく座につきてのち、かくさはがしき世につかへて、心のやすきいとまなく、なまぐさくけがらはしき食物に腹をやしなひ、*重欲の焔に身をこがし、うれへの煙にこゝろをなやまし、此とし月ををくり給ふは、さこそくるしく侍べるらん。しばしこゝにて思ひをなぐさみ、心をはらし給へといふに、三人ながらおどろきあやしみて、とかくのこと葉はなく、只手をつき首をふせて、うなづくより外はなし。童子四人うつくしく出たち、膳部きよらかにすへわたす種々の珍味、いろ〳〵のさかな、数をつくして出しけり。*猩々のくちびる、*熊のたなごゝろ、*鹿のはらごもり、*麋の羹ものは、その名を聞つたへたるばかりにて、これやその類なるべからんと思ひあやしむもいふばかりなし。

日すでに暮になりて、*九花のともし火をかゝぐるに、花やかに出たち、小袖うちききよらにして、薫みちたる遊女十人すゝみ出て、夜もすがら、いまやう朗詠うたひ舞けるありさま、つら〳〵見れば、*此比海道に名をえたる遊君どもなり。是はいかにとおもふに、その中に*春とかやいふ女は*東琴の上手にて、*柱たてならべ引ならすつま音、歌にあはせて

*花のえんのゆふ暮おぼろ月夜にひく袖
さだかならぬ契りこそ心あさくもみえけれ

とうたふは、雲にひゞきて、ひくは空にみちたり。むかし*源氏花のえんの夜、内侍のかみとわかれの時、あふぎをとりかへて出給ふ。そのあふぎの歌に、

*世にしらぬ心ちこそすれ有明の
月のゆくゑをそらにまがへて

こよひかゝる御たいめんは、思ひの外なればさだかならず。*しとげなき御事と心あさくやといふ歌の心ばえ、*時にとりてもてなしあるところなり。三人ながら此歌に心はすこしうかれたり。

*みほの松かぜふきたえておきつ浪もあらじな
水にうつろふ月とともにながめにつゞくふじさん

所がらなる琴の*唱歌かなといとゞうきたつ爪音、風もしづかに海原の浪もおさまり、雲きえて詠めにあかぬ月影の、うつるもことさらおもしろく、みほよりふじのみえわたるけはひ、何にたとへんかたもなし。源蔵かくぞよみける。

*夜もすがらふじのたかねに雲きえて
清見が関にすめる月影

三人ながら興に入て、やう〳〵夜もはや明がたになり、野寺のかねの音は聞えねど、鳥の声はまのあたりにつげわたる。

名ごりはつきぬことながら、又こそ尋ねまいらめとて、いとまごひしてたち出つゝ、半町ばかりにして跡をかへりみれば、霧ふさがり雲とぢて、松のこずゑ吹をくる風に、岸より船にのり家に帰り、こよひ十人の遊女は、いかゞして由井源蔵がもとへはまいりけるぞと問せけるに、十人ながら今夜の夢に、やごとなき人の御もと御名あるかた〴〵に逢奉り、酒もりせしとおぼしてさめ侍べり。その所はいづくともしらずと、おなじさまにこたへけり。きはめたるふしぎかなとて、かさねて使をつかはして尋ねさするに、家もなく門もなし。三人ながらわづかなる知行を給はり、是をいかめしき事に思ひけるも、今さらにくやみけれどそのかひなし。

○興津　駿河国庵原郡興津（現静岡県清水市）　○由井源蔵　未詳。由井は地名（駿河国庵原郡由比）からとるか。　○鎌倉伺公の人の末　鎌倉幕府（九代高時の代、元弘三（一三三三）年滅亡）に仕えていた人の末裔。　○藤山兵次　未詳。名字は「富士山」からとるか。　○浦安又五郎　未詳。　○神原四郎　未詳。名字は地名（駿河国庵原郡蒲原）からとるか。　○友なひ　「伴トモナフ輩友徒」（印度本）　○富士足柄の山にはむかしより仙人ありて　第一話注参照。　○足柄山　第一話注参照。　○霞を吸ひ　「霞」と「仙人」は縁語（『類舩集』）。仙人の思想は姑射山の神人（『荘子』「逍遥遊」）に発するか。　○夜る昼三とせ　『本朝神社考』四「足柄」に、足柄明神が唐へ渡りその後「三年経テ明神本朝ニ帰」とあるのに関係あるか。　○長生不死　振り仮名「ひやうせいふし」は「ちやうせいふし」の誤刻。　○神君　道家の神。　○意　「意　コヽロ」（諸節用集）　○修練　道家の鍛練の術。　○丹薬　仙薬。精練してつくった不老不死の薬。仙人譚に多用される。　○奉行　鎌倉・室町幕府の職名。奉行人。実務に携わる中・下級の事務官をいう。　○頭人　鎌倉・室町幕府の職名。裁判を担当した引付方（三方ないし五方）の一方（一部局）の長官。引付衆や奉行人を統率し裁判をおこなった。　○三保が崎　第一話注参照。　○海郎の世わたる釣舟か　「泊定めぬ海士の釣舟候ふよ」（謡曲「通盛」）。節用集類では「海士・海女」。「海郎」の表記は男性である事を示すためか。　○それ風はつなぐべからず、影はとらふべからず　【出典】参照。「夫風不可繫。影不可捕」（『太平広記』十七「裴諶」）　○桃桜　「のゝ」は「もゝ」の誤刻。　○荊茅はら道もなし　荊や茅が、道もわからぬほど生茂っているさま。　○玉の甍、虹の梁　美しい棟や梁。以下は、異境描写の常套（『伽婢子』六―一「伊勢兵庫仙境に到る」など）　○糸竹　琴や笛「Itotaqe. 糸竹または管絃。琴と笛と」（日葡）　○五色　「五色　青赤黄白黒」（易林本）　○迦陵　迦陵頻伽。極楽浄土にいるという美声の鳥（寛文三年刊『往生要集』（絵入り）五に挿絵がある）　○金しろ銀の鱗　金魚、銀魚「金魚　外国ヨリ来テ五六十年来家々之ヲ玩章シテ」（『本朝食鑑』七）　○赤き栗緑の棗　共に異境描写に多用される。棗は原産地未詳だが、中国大陸で多品種あり食用および薬用として栽培される。果実は二センチメートル前後で初め緑色、後に紅色に熟す。日本では奈良時代から栽培される。　○からわ　唐輪。天正期から行われた女性の髪の結い方のひとつ。髪を頭上に束ね、その根を余りの髪で巻き付けたもの。　○をりこと　折琴。折たたみ式の琴。　○西湖の壺　未詳。西湖（浙江省湖山の麓にある湖）のように美しい水色の壺の意か。　○蜀江の錦　蜀の錦江（江西省餘江県）で糸を洗い織った美しい錦。　○曲禄　僧が法会などで用いる椅子（『訓蒙図彙』三）本話では書院の中におかれる。　○唐絵　室町時代に宋・元から輸入された絵画。大和絵（本絵）に対して唐絵という。　○重欲の焔に身をこがし　「こがす」と「煙」は縁語（『類舩集』）。重欲は深い欲。　○猩々のくちびる　中国の想像上の動物。人面獣身で人語を解し海中に住むという。くちびるは珍味として知られる。「猩々…肉　之ヲ食セバ味セズ飢ヱズ」「肉ノ美ナルモノハ猩々ノ唇」（『本草綱目』五十一）　○熊のたなごゝろ　熊の掌の肉。珍味。「熊…掌　之ヲ食ヘバ風寒ヲ禦ギ気力ヲ増ス」（『本綱』五十一）　○鹿のはらごもり　鹿の胎児「Faragomori　殺した牝鹿の胎内にいる小鹿で、食用にされるもの」（日葡）　○麝の糞もの　鹿の肉の吸物。麝は角のない小型の鹿。雄は短い牙を持つ。美味しい肉として珍重される。「肉　五臓ヲ補ス」（『本綱』五十一）。これらの珍味は異境描写の常套で『伽婢子』八―一「長鬚国」等にもみえる。　○九花　宮

室や器物等の美しい装飾「九華の帳を押しのけて玉の簾をかかげつゝ」（謡曲「楊貴妃」）　○**此比海道に名を得たる遊君どもなり**　足柄山の麓、関本宿（現神奈川県南足柄市関本）に遊女がいた。「関下の宿を過ぐれば、宅を並ぶる住民は人を宿して主とし、窓に歌ふ君女は客を留めて夫とす」（『海道記』十五）　○**春とかやいふ女**　未詳。　○**東琴**　唐琴に対して日本式の琴の称。六弦で神楽や雅楽に使用。　○**柱**　琴の胴の上に立てて弦を支え、位置をかえて音調を調節する具。　○**花のえんのゆふ暮**　未詳。　○**源氏花のえんの夜**　源氏（二十歳）は、紫宸殿の観桜の宴の夜に出会った女性（朧月夜）と、互いの名を明かさないまま扇を取替えて別れる。後にその女性を恋しく思って、件の扇に歌を書き付けた（『源氏物語』「花宴」）。　○**世にしらぬ**　まだこの世で経験した事のないような悲しい気持ちがする。有明の月（女）の行方を空に見失って（「花宴」所収）。本話では由井源蔵と三人が偶然に出会う事がこの歌と関連する。　○**しとげなき**　「しどけなき」の誤刻。堅苦しくなくくつろいだ感じの。　○**時にとりて**　前出の歌謡「花のえんのゆふ暮…」が時期に合いもてなすのにふさわしい意。　○**みほの松かぜふきたえて**　未詳。　○**所がらなる**　この場所柄にふさわしい意。　○**唱歌**　「シヤウガ　Xōga」（日葡）　○**夜もすがら**　『詞花集』九雑上。『歌枕名寄』五一六二・五一八五。『類字名所和歌集』五五四六・六九六一。

【余説】本話冒頭で由井源蔵は「そのかみは鎌倉伺公の人の末」と設定されるが、本文中の「奉行・頭人」との関係からすると、おそくとも室町時代の人となり「末」を末裔と読むには聊か無理があるか。

【出典】『太平広記』十七「裴諶」〈麻生〉。

注に示した通り、本話には「裴諶」と同様の表現が見られる。「裴諶」のあらすじは次の通り。

隋の大業年中裴諶は仙道を得るため王敬伯・梁芳とともに白鹿山に入るが、梁芳は死に敬伯は下山する。数年後官吏になった敬伯は裴諶に会い、仙境でもてなされる。その後裴諶には二度と会えなかった。

【類話】『太平広記』十七「裴諶」、同二十七「司命君」、同二十三「張季二公」、『剪燈新話』四―四「鑑湖夜泛記」〈富士1〉。

なお異境の場面は『伽婢子』六―一「伊勢兵庫仙境に到る」、八―一「長鬚国」の描写に酷似する。

○富士垢離

近き比より京も田舎も、*富士垢離といふ事のはやりて、日毎に河水にひたり垢離をとり、*浅間大ぼさつを念じ奉り、よくおこなへば*奇特あり。いか成やまひをもいやし、身のまづしきも、徳つきてゆるやかになるとかや。大ぼさつのれいげんあらたにましますとて、世にもてはやし奉る。

*摂津国ゆするぎとかやいふ里に、鳥岡弥二郎といふもの、おもき病をして、*くすしのちからにもあまりてすべきやうなく、浅間の*行人を頼みて、願だてしていのりければ、ほどなく*ほんぶくして、このよろこびに、ふじまうでを思ひたち、*先達をもつて山にのぼる。

まことに*三国ぶさうの名山なり。峯は*半空にさゝげ、遥に雲に入て、夏の夜なれども雪霜降つみ、ふもとの山々は、春めきわたりて、みどりの色こまやかなり。つえにすがり路をつたふに、*千尋の壁にのぼるがごとし。雲霧は足のしたにたなびき、遠山は猶かすかにへだたり、をぼろにして影のごとし。よぢて上るべき藤蔓もなし。砂にむねをつき、はふ〳〵峯にいたり嶽におよぶ。

むかし*常陸房海尊とかや、*源の九郎義経*奥州衣川高館の役に、一族従類みなほろびけるに、海尊一人は軍勢の中をのがれてふじ山にのぼりて身をかくし、食にうえてせんかたのなかりしに、浅間大ぼさつに帰依して、守りをいのりしに、岩の洞より飴のごとくなる物わき出たるを、なめて心むるに、味はひ*甘露のごとし。是をとりて食するに飢をいやし、おのづから身もすくやかに心よくなり、朝には日の精を吸て霞にこもり、つひに仙人となり、折ふしはふもとにくだり、里人に逢ては、そのちからをたすけ、人のたすかる事今にをよびて、世

にかくれてありといふ。

然るに弥二郎、遠き旅路につかれて*心たゆみ、足をあやまち、峯ちかき所にて風に吹たをされ、ころびおつる事玉をはしらかすが如し。かゝる所に年の程六十あまりの法師、にはかにあらはれて弥二郎をとらへとゞめ、あやうき命をたすけたり。弥二郎ひきたてられ、かの老僧にむかひ手を合せておがみつゝ、いか成*沙門にておはしますぞや。御庵りはいづかたぞ。御名をば何と申すやらんと問ければ、我は此ふもとにすむ法師なり。世をのがれたる身の名のるまでには及ばず。*下向の道にはたよりもよろしければ、立よりてやすみ給へとやくそくして、山よりくだるかとみえしが、すがたはゆくかたなくうせにけり。

弥二郎かくてげかうの道に、ふもとのあたりを尋ねしに、かたはらにちいさき門あり。蔦かづらまとはり、草のみふかくさだかならぬを、わけ入ければ、さきの法師出むかひ、一町ばかり行ければ、よしある庵りのうち、仏壇をかまへ、本尊は*大日如来、ひかりあたりにかゞやけり。山よりおろすあらしには、をのづから*梵音をとなふるかと聞え、海よりこゆる波にはまた、*錫杖を誦するかとおぼゆ。*妄想の雲はれて、*無明の睡りをさますとかや。勧行の功力に感じて、庭には時ならぬ花さきつゝ、煙きえ霧はれて、うき世のほかのすみかなり。

帰らんことをわすれて、しばらく物がたりせし所に、法師かたりけるやう、我はもと東国のものなり。久しく奥州衣川のあたりにありて、心の外なるわざはひのありしを、わづかにのがれて此所にかくれ、身をおこなひ、たましゐを煉て、年の過る事をおぼえず。独りたのしみをえて、をりふしはむかしを思ひ出て奥州にも行通ふことあり。もとよりわびてすむ故に、まいらすべき物もなし。旅のつかれにこれなりともめせとて、*わり子の内より*枸杞の葉の飯をぞすゝめける。

弥二郎ふかく情をかんじ、さるにても御名ゆかしくこそ。名のりてきかさせ給へといふ。法師は眉をひそめて、名のるにつけてはあやしかるべし。まことはわが名は*残夢といふ。人に交はらねば、時うつり世のかはるをもしらず。今の世の中はいかにといふ。

弥二郎語りけるは、*そのかみ尊氏公世をおさめて十三代に及べり。諸国の勇士そばだちおこりて、たがひに怨をむすび境をあらそひ、国を合せ功をつのり、駿河には*北条の氏康、甲斐に*武田の晴信、ゑちごに*長尾の景虎、ひたちに*佐竹、*会津に芦名、*越前に朝倉、周防に*陶の晴賢、*安芸に毛利、*出雲に尼子、*豊後に大友、*ひぜんに龍造寺、*伊勢の国師、近江に*浅井、*佐々木、畿内南海のあひだには、*三好が一族、おなじく*家人松永、その外諸国郡郷のうちに*武勇ある輩其数をしらず。小身なるは大家の旗下となり、弱きはつよきにをしたをされ、臣として君を策り、父子怨を結び、兄弟敵となり、利欲をもつぱらとして*佞奸をかまへ、忠孝をわすれて*狼心をさしはさみ、運にのるときは、*庸夫も国のあるじとなり、勢を失なへば、貴族も卑賤にくだり、栄枯地を替、盛衰日をあらため、諸国一同に乱れて、軍更に止時なく、そのあひだの*残害いく千万とも知がたし。しかる所に*織田信長公、尾州よりおこりて猛威をふるひ給ふ。まづ暫らくたがひに変を見あはせて、四海の波しづかなるに似たり。此後また世の中、いかになりゆくべしとも知がたしとぞかたりける。

残夢法師つくづくと聞て、安否は運による事にて、天理神明にまかすべし。知恵勇力才覚にては叶はず。たゞ慈悲正直をもつて本とす。日もはやかたふきて、落くる風の音もすさまじ。此所は夜に入ぬれば、おそろしき事あり。人の心をおどろかすに、はやく*旅屋にかへり給へとて、をくり出して、又庵りの内に帰るかとみえしが、空のけしきくらみかゝりて、物すさまじ。

弥二郎足ばやにゆくゝかへり見れば、庵りはなく成て、人のさけぶこゑ、煙にまじはりて、空に聞ゆ。先達いふやう、こゝはふじのふもと、*地ごく修羅のありさま、くもる夜はあらはれみゆ。すみやかに帰り給へとて、弥二郎をつれて我宿にぞ帰りける。

○富士垢離　富士の山開き前の陰暦五月二十五日から六月二日にかけて、富士講の行者が毎日水垢離をとって心身を清め、富士権現を拝する信仰。『日次紀

事』五月二十五日の条に「今日より六月二日に至て、富士行人毎日河辺に出て富士垢離を修す。遥に富士権現を拝す。是れすなわち富士参詣に同じ」とあり、また同六月の条に「山城の国より山上を修する者の、鴨水の側に精舎を構、精進潔斎毎日水に入て浴す、これ富士垢離と謂ふ」とある。 ○**浅間大ぼさつ** 第一話注参照。 ○**奇特** 神仏のあらわす霊験。 ○**摂津国ゆするぎ** 未詳。摂津国に該当する地名なし。 ○**くすし** 医者。 ○**行人** 修行者。前出『日次紀事』五月二十五日条に「其の間男女人を憑み、或は病を折り或は福を索む。其の求の紙符を願人の人に授く」とあり、また同六月の条に「其の間洛中児女、行人をして病を祈り福を索めしむ。或は又斯の人に憑て代参を勧めしむ」とある。 ○**ほんぶく** 本復。病気が全快すること。 ○**先達** 「センダチ Xendachi」(日葡)。「先達 センダチ」(饅頭屋本)。修行の先達の意から、入山に際して道中の案内や参籠行事の指導をする者。既出『日次紀事』同条に「所願有る人自ら行人に雑て垢離を修す。酋長を先達と称す。其の会する所を富士小屋と謂ふ」とある。 ○**三国ぶさう** 三国無双。日本、中国、印度の三国でならぶもののないこと。 ○**半天** 空の中ほど。『日葡』『書言事考』『元亀本運歩色葉集』など。 ○**千尋** きわめて長く、また深いこと。 ○**常陸房海尊** 源義経の臣。『義経記』八「衣河合戦の事」では、合戦の直前、朝から近くの山寺へ参拝に出たまま戻らなかったとあり、それが後年、民間伝承によって海尊長生者伝説へと受け継がれてゆく(柳田国男氏『東北文学の研究』)。『西鶴諸国はなし』一―六「雲中の腕押」や『狗張子』などはこれを説話化したものである。(森山重雄氏『西鶴の世界』)。また、以下の海尊に関する記述は『本朝故事因縁集』一―五十「常陸坊海尊成仙人」の「文治五年伊予守判官義経奥州高館城にして滅亡の時、常陸坊遁去り富士山に入る。食事無し。石上に飴の如きもの多し。これを取て食す。是より食はずとも飢ること無し。死せずして三百年、木の葉を衣と為して住めり。寒暑無く、近代信濃国の深山に岩窟有り。これに遊んで年未だ老いずと云々」による。【出典】参照。 ○**源の九郎義経** 平治元(一一五九)~文治五年(一一八九)。幼名牛若丸。父は源義朝。母は常盤。源頼朝・範頼は異母兄。頼朝の不信を受け、藤原秀衡を頼って奥州へ逃れるが、文治五年衣川で没した。三十一歳。 ○**奥州衣川高館** 現岩手県西磐井郡平泉町、陸奥国磐井郡衣川村にあった城。文治五年閏四月三十一日、藤原泰衡によって居城を襲撃された義経は妻子とともにここで自刃した。 ○**甘露** 蜜のように甘い飲料で、不老不死の霊液。前出『本朝故事因縁集』に「評に曰く富士山熊野山を唐朝より蓬莱山と聞て秦の始皇蓬莱不死の仙薬を求めん為に徐福と云者を渡す。徐福求むること得がたうして此の山に住し終に民となる。其の末裔秦氏是也。常陸坊が食する物は不死の仙薬ならんか。」とある。 ○**心たゆみ** 油断すること。 ○**沙門** 僧侶。「僧を沙門と云」(『塵添壒嚢鈔』十三―十八)。「出家之総名」(『書言字考』)。 ○**下向の道にはたよりもよろしければ** 参拝した帰り道のついでにちょうどよい所なので ○**大日如来** 宇宙の実相を仏格化した根本仏で、真言密教の教主。智を表す金剛界の大日と慈悲を表す胎蔵界の大日がある。 ○**梵音** 四箇法要の一つ。「十万所有勝妙華」などと清らかな音声で唱え、三宝に供養するもの。 ○**錫杖** 四箇法要の一つ。錫杖の偈を唱え、一節の終りごとに上部の枠に数個の鐶がついた杖を振る。鐶が揺れて鳴るその音。 ○**妄想** みだらな事や正しくない考え。仏教語。 ○**無明の睡り** 真理に暗い無知の煩悩に迷う状態を、眠りにたとえていう。仏教語。「無明眠 ムミヤウノネムリ」(『書言字考』)。 ○**わり子** 破子・破籠。檜の白木で作った蓋つきの折箱。内部に仕切りをつけ、弁当箱として用いた。 ○**枸杞の葉の飯** 枸杞の若芽を混ぜた飯。「其の葉石榴(ざくろ)の葉の如く軟薄にして食用に堪たり」(『和漢三才図会』八十六)とある。 ○**残夢** 『本朝神社考』六「都良香」の条に「奥州に残夢と云う者有。自ら字して呼白と曰く、又自ら秋風道人と称」し、元暦・文治の事を語り「彼れ蓋し常陸房ならんや」とある。好んで枸杞飯を食し長生きであったという。また『会津風土記』仏寺「実相寺」の条に「残夢者当時第二十二世桃林契悟禅師是也」とある。 ○**そのかみ尊氏公世をおさめて十三代に及べり** 第十三代室町幕府将軍、足利義輝の時代。天文十五(一五四六)~永禄八(一五六五)。 ○**北條の氏康** 永正十二(一五一五)~元亀二(一五七一)相模国小田原城主。 ○**武田の晴信** 大永元(一五二一)~天正元(一五七三)。始め甲斐国領主から起り、のち信濃・駿河・遠江・西上野・東美濃を支配した。法名が信玄。 ○**長尾の景虎** 上杉謙信。享禄元(一五三〇)~天正六(一五七八)越後国領主。永禄四(一五六一)武田信玄と川中島で戦う。 ○**ひたちに佐**

竹　佐竹氏は平安時代末から戦国時代の常陸国の豪族。ここは佐竹義重、天文十六（一五四七）～慶長十七（一六一二）を指すか。　○会津に芦名　芦名氏は中世会津地方の領主。芦名義広の天正十七年伊達政宗に敗れて滅亡した。ここでは芦名盛氏、大永元（一五二一）～天正八（一五八〇）を指すか。　○越前に朝倉　朝倉氏は越前守護斯波氏の守護代。ここでは朝倉義景、天文二（一五三三）～天正元（一五七三）を指すか。　○陶の晴賢　大内家の重臣。大永元（一五二一）～弘治元（一五五五）。天文二十年（一五五一）、謀反して大内義隆を自刃させた。　○安芸に毛利　毛利元就。明応六（一四九七）～元亀二（一五七一）。弘治元（一五五五）安芸国厳島で陶晴賢を亡ぼした。　○出雲に尼子　ここでは尼子晴久。永正十一（一五一四）～永禄三（一五六〇）、義久（生年未詳～慶長十五（一六一〇））父子を指すか。　○豊後に大友　大友氏は鎮西一方奉行兼豊後守護。ここでは大友宗麟、享禄三（一五三〇）～天正十五（一五八七）を指すか。　○ひぜんに龍造寺　ここでは龍造寺隆信。享禄二（一五二九）～天正十二（一五八四）を指すか。大内氏と結び肥前国最大の領主となった。　○伊勢の国師　「国師」は国司。北畠具教。享禄元（一五二八）～天正四（一五七六）を指す。永禄十二（一五六七）織田信長の伊勢進攻により降伏。　○浅井　浅井氏は戦国時代、近江国の大名。ここでは浅井長政、天文十四（一五四五）～天正元（一五七三）を指すか。　○佐々木　佐々木氏は近江国佐々木荘を本拠とする守護大名。本宗は六角・京極二氏に分れるが、六角氏は織田信長に抗して滅亡した。　○三好が一族　三好氏は中世阿波国の豪族。ここでは三好長慶、大永二（一五二二）～永禄七（一五六四）、義賢、大永六（一五二六）～永禄五（一五六二）兄弟を指すか。　○家人松永　松永久秀。永正七（一五一〇）～天正五（一五七七）。天文十（一五四一）以前から三好長慶に随従し、長慶の死後は久秀と三好三人衆（三好長逸・政康・石成友通）とで事実上三好政権を二分、のち三人衆にも勝利するが、信長に背いて自刃。　○武勇　武術に優れ勇気があること。「ブヨウ」の読みは『饅頭屋本』にみられる。　○佞奸　口先がたくみで心のねじけているさま。　○狼心　残忍な心。　○庸夫　平凡な男。このあたりの記述は『伽婢子』一―二「黄金百両」「臣としては君を謀り、君としては臣をそむけ、或は父子の間と雖も快からず、兄弟忽ちに敵となり、運つよく利に乗る時は、いやしきが高くあがり、小身なるが大にはびこり、運衰へ勢つきては、大家高位もおし倒され、聟を殺し子を殺せば、一家一族のわりなきも、只危きにのみ心を砕きて、安き暇更になし」に似る。　○残害　傷つけ殺すこと。　○織田信長公尾州よりおこりて猛威をふるひ給ふ　織田信長。天文三（一五三四）～天正十（一五八二）。『伽婢子』五―二「幽霊評諸将」に「近頃尾州織田信長、すでに草創大業の志ありて近国をしたがへ、漸々大軍に及べり。弘治丙辰の年駿河の今川義元、さしも猛将のほまれありて、しかも大軍なりしを一朝に亡ぼしたり。」とある。これは永禄三（一五六〇）の桶狭間の合戦を指し、本作の作品現在はこれから後の天正八（一五八〇）前後と考えられる。　○旅屋　宿泊所。　○地ごく　平仮名本『因果物語』「生きながら地ごくに沈みし出家の事」に「地ごくに三種あり、一には根本八熱地ごく、二には根本八寒ちこく、此二種は来世にあり、三に孤独ぢごくとて、日本にては箱根、浅間温泉、その外広野海辺みな是あり」とある。また、「日本ニ地獄有リ高山ノ嶺常ニ焼ケ温泉絶ヘズ。…駿河富士、信濃浅間…等ノ若キ也。嶺風風ト燃ヘ、熱湯起リ、汪汪ト湧キ出、宛然焦熱修羅ノ形勢有リ」（『和漢三才図会』五十六）とある。

【出典】常陸房海尊に関する一節は『本朝故事因縁集』一―十五「常陸房海尊成仙人」に基づき、また残夢＝海尊という発想は『本朝神社考』六「都良香」〈富士2〉後半部分と、『会津風土記』「実相寺」〈富士2〉から用いている。

【類話】『伽婢子』二―一「十津川の仙境」〈富士1・2〉、『西鶴諸国はなし』一―六「雲中の腕押」〈富士2〉などが挙げられる。

○守江の海中の亡魂

＊豊後国守江の浦の海上には、亡霊ありて人をなやます事たび〳〵なり。

そのかみ＊慶長五年九月に＊石田治部少輔謀反して、＊美濃国関が原にして軍あり。東軍のために打まけ、治部少輔一味の西国勢みな逃おちて国に帰る。＊黒田勘解由入道は＊安喜の城に陣をかまへて、＊番船

数十艘を海上に出して、落下る勢をとがめらる。島津の舟とて、くらき夜に打とをる。番船つよくとがめしかば、軍になり、薩摩船より*炮爍火矢をなげそこなひ、みづから味方の舟に落ければ、船中三十八人一同に焼沈みけり。其中に*中村新右衛門尉といふもの亡霊となり、沖中往来の人をなやますとかや。

*寛永の末つがた夏のころ、*安芸国倉橋嶋のなにがしが娘、*日向の国佐土原といふ所にすみわたり、故郷に帰るとて、この沖中にして、俄に物のけつきてさま〴〵の事口ばしりけるを、何ものなればか、る船の中に来りて、人をなやまし狂はするぞやと問ければ、娘口ばしりて、我はそのかみこの沖中の軍に海にしづみて死ける中村新右衛門といふものなり。亡魂今もこゝにさまよふて、うきぬしづみぬくるしみをうくれども、我をとふらうものなし。あまりの苦しさに、今此女性に寄て望みをいたすものなり。わがために法事をいとなみてたべとて涙を流しければ、船中おどろきて、*安喜の湊に船をつけて、浦人に問ければ、年々此浦を過る旅人に寄て、物に狂はする事たび〳〵ありといふ。さてはとて、僧を請じて二夜三日の仏事をいとなむあひだに、関が原*軍の事、此浦にてのたゝかひの事、娘物がたりせしに、聞人あはれがりて涙を流す。

かくて法事の過る前かた、有がたや此仏事の功徳にて、くるしみすこしゆるやかに成ける事よとて、娘の狂気はさめたり。それより後は、ばうこんもうかびぬらん、このごろはたへて人にも寄つきて狂ひける沙汰もなし。

○豊後国守江の浦　安岐郷（現大分県杵築市）。国東半島東部、別府湾北部の入り江。守江港は順風待ち、避難港として江戸期から利用された。　**○慶長五年九月**　西暦一六〇〇年。関ヶ原の合戦は九月十五日。　**○石田治部少輔**　永禄三（一五六〇）～慶長五（一六〇〇）。豊臣秀吉の側近で、慶長三年以後は五奉行として豊臣政権を支えたが、関ヶ原の戦いで敗れて捕らわれ、同五年十月一日京都三条河原で処刑された。　**○美濃国関が原**　不破郡西部（現岐阜県関ヶ原町関ヶ原）。古くから交通の要所であり、政治的・軍事的に重要な役割を果たした。慶長五年には、既に町場化していた（『徳川家康禁制朱印状』）。　**○黒田勘解由入道**　黒田孝高。天文十五（一五四六）～慶長九（一六〇四）。織田信長の中国進出に際し、羽柴秀吉の参謀として軍略家の名を馳せた。八九年に剃髪。関ヶ原の戦いでは長子長政とともに徳川方に与し、大友吉統を捕虜とし、筑前一国を領した。　**○安喜の城**　「安喜」は「安岐」で「あき」。国東郡安岐郷（現大分県東国東郡）にあった。応永年間（一三九四～一四二八）の築城の山城。大友一族の田原氏の居城であったが、関ヶ原の戦いで西軍についたため、黒田勢に攻め落とされた。（『日本城郭大系』十六）　**○番船**　港口・関所等で、必要に応じて警護、見張りをする船。　**○炮爍火矢**　炮録火矢。炮録を石火矢のように発射するようにした火器。「炮録」は戦国時代の水軍が用いた焼夷弾的爆弾。「天墜砲（ほうろくびや）　其ノ大キサ斗ノ如シ。法ヲ用キテ外セバ半天ニ至リ、賊巣ニ墜チテ震ヒ響クコト雷ノ如シ。黒夜賊ヲシテ自ラ乱ラシメテ相殺ス。内ニ火ノ塊数十有リ。能ク賊ノ営寨ヲ焼ク、必ズ救フコト能ハズ。」（『和漢三才図会』二十一）　**○中村新右衛門尉**　未詳。　**○寛永の末つがた**　寛永は一六二四～一六四三年。関ヶ原の戦いから約四十年後の設定。　**○安芸国倉橋嶋**　安芸郡倉橋島村、瀬戸島村、渡子島村（現広島県安芸郡音戸町音戸、音戸町渡子、倉橋町）。島の南部は瀬戸内海交通の要所として、鎌倉期には海賊取り締まりの詰め所が置かれた。　**○日向の国佐土原**　日向国那珂郡田嶋郷（現宮崎県宮崎郡佐土原町）。宮崎平野の中央東部に位置し、東は日向灘に面する。　**○安喜の湊**　安岐川の河口。田原氏の安岐城に近く、軍事的機能を果たした。慶長五年以降は、漁港、海運港として存続。　**○軍**　「軍」の振り仮名は原文のまま。

【出典】『本朝故事因縁集』一―十四「豊後守江海上亡魂」〈冨士2〉。ただし、本話の「寛永の末つかた」が「天和三年」となっている。また、『太平記』十一「越中守護自害事附怨霊事」にも、海で死んだ人の亡霊が、後世に現れて人に取り憑く話が描かれている。関ヶ原の戦いの際の島津勢の記事（本章該当部）は、『惟新公関原合戦記』、『黒田家譜』十三、『関ヶ原戦記』等にも見える。

○嶋村蟹

＊細河高国の家臣＊嶋村左馬助は、＊武篇を心にかけし者なり。わづかなる＊あやまちありて殺されたり。亡魂すでに蟹となり、＊摂州尼が崎におほく生出たり。世に＊嶋村がにと名づく。余所のかによりは、ちいさくしておもてのかたに皺おほくみゆ。さればにや顔のしわみたる人をしまむらがにのやうにといへるは此事なりとかや。

＊昔平氏の一門、＊長門国壇の浦にして海にしづみしその亡魂ことゞ〳〵く＊蟹となりて＊長門国赤間が関にあつまり、今の世までもおほく有けりと聞つたへし。

＊横ばしる芦まのかにの雪ふれば
　あなさむげとやいそぎかくるゝ

と古き歌にも読けり。一念のまよひあれば、いかなるものにも生れかはる＊輪廻の有さまなりと＊仏も説をき給へり。

＊治承の古しへ＊源三位頼政むほんして、＊宇治川をへだてゝ源平の軍あり。うたれたるもの、＊亡魂蛍になりて、今の世までも年毎の＊四月五月には、＊平等院のまへに数千万の蛍あつまりて、光りをあらそふて相たゝかふ。＊化して異類となると、＊賈誼がこと葉空しからずや。

○**細河高国**　文明十六（一四八四）～享禄四（一五三一）。室町後期の武将。管領となり畿内近国を支配したが、大永七年（一五二七）三好元長・細川晴元らに京都を追われ、三一年に尼崎で自刃した。　○**島村左馬助**　未詳。なお、『本草綱目啓蒙』四十一は「享禄四年摂州尾崎合戦ノ時、島村弾正左衛門貴則ノ霊此蟹ニ化スト云伝フ」とある。　○**武篇**　「武辺」とも。武芸に秀でた者。　○**摂州尼が崎**　摂津国川辺郡（現兵庫県尼崎市）。延暦四年（七八五）に神崎川が開削されて以来の京都へ通じる要衝の地。戦国期には細川高国が当地を支配した。○**島村がに**　「鬼蟹　俗ニ云武文蟹。其小キ物ヲ島村蟹ト名ク。…享禄四年細川高国三好ト摂陽ニテ戦フ。家臣島村何某敵二人ヲ挟ミ尼崎ノ水中ニ没死ス。故ニ尼崎浦ノ小鬼蟹、俗称シテ島村蟹ト曰フ。其大サ一二寸、円ノ腹ノ文鬼面ノ如」（『和漢三才図会』四十六）。「此外蟹類甚多シ。枚挙ニ勝ヘズ。ソノ中平家ガニト呼ブ者アリ。一名シマムラガニ、摂州武文ガニ同上。一説ニ蟹ト云フ」（『本草綱目啓蒙』四十一）　○**壇の浦**　長門国豊浦郡（現山口県下関市）。関門海峡の最も狭くなる辺り。寿永四年（一一八五）壇ノ浦の合戦にて平氏一門が滅亡。　○**赤間が関**　長門国豊浦郡（現山口県下関市南部）。古くから交通の要所として栄えた。「長門国赤間関壇浦ノ海上ニ於テ、各三丁ヲ隔テテ舟船ヲ艚向フ」（『吾妻鏡』寿永四年三月二十四日）　○**横ばしる**　『夫木和歌抄』二十七雑部九動物部所収。　○**輪廻**　「Rinye　リンエ　さまざまな転生や変身の一続きの輪をたどりつつ、霊の救われる道を迷い歩く」（日葡辞書）　○**仏も説をき**　『過去現在因果経』第二・第三、『観仏三昧海経』第六感無量心品、『法華経』第一などに説かれる。　○**治承の古しへ**　治承四年（一一八〇）四月、源頼政が以仁王を奉じて挙兵し、五月二十六日宇治で敗死した合戦。　○**源三位頼政**　長治元年（一一〇四）～治承四年。源仲政の子。平治の乱では源氏としてただ一人平家方につく。治承四年以仁王を奉じて挙兵、平家討伐の口火を切ったが宇治で敗死。　○**宇治川**　琵琶湖から流下して大阪湾に注ぐ淀川水系の中流部の古称。京都府宇治市近郊。　○**亡魂蛍になりて**　「蛍　其蛍下テ山州宇治川ニ到テ（約スルニ三里許）夏至小暑之間盛リト為。然ドモ石山之多ニハ如カズ。此レモ亦西ヘ宇治橋ヲ限テ下ラズ也。……俗以源頼政之亡魂ト為スモ亦笑フ可シ。此時ヤ蛍見ノ遊興群レ集リテ天下知ル所也」（『和漢三才図会』五十三）　○**四月五日**　未詳。なお、以仁王の令旨は四月九日。「扇芝は源三位頼政治承四年五月二十六日比所において自殺す。委ハ平家物語に有り」（『都名所図会』五）　○**平等院**　朝日山平等院。山城国宇治郡（現京都府宇治市）。天台浄土教系の単立寺院。藤原頼通の建立。本尊阿弥陀如来。　○**化して異類となる**　「化シ異物ト為ル、又何ゾ患ルニ足ラン」（『史記』列伝「屈原賈誼」）等。　○**賈誼**　漢、洛陽の人。若年時から詩文にたけ、二十余才で博士として文帝に召されるが大臣に疎まれ、長沙王の太傅、その後梁の懐王の太傅となる。

【出典】『本朝故事因縁集』二―四十六「平家蟹」（冨士2）。

個々に伝わる島村蟹等の伝承をまとめたと見るのが妥当か。

○北条甚五郎出家

＊長尾謙信の＊家老北条丹後守は＊越後の国椽生の＊城代として＊大剛の名あり。其弟＊甚五郎は年いまだ二十あまりなり。兄にをとらぬ＊勇士なり。

＊天正元年の春二月、心地わづらひ俄に死けり。＊平生仏とも法ともしらず、死するや直に＊琰魔王界におもむく。＊大王出ての給はく、汝世にありし時いづれの功徳をいたせしや。罪科は山のごとしといへども、＊寿の算いまだあり。ゆるして二たび、人間にかへすべし。去ながら汝が母すでに地ごくにあり。よびよせて対面せさすべし。よみがへりなばよく跡をとふらふべきなりとて、＊司録に仰せてめしけるに、まことにやせつかれたるありさま、みしにもあらぬを＊手かせ＊首かせをいれて庭のおもてに引すへたり。母は甚五郎を見て涙を流し、我世にありし時は、人の色よき小袖をうらやみ、馬＊物のぐ鎧太刀までもよくしてあたへ、和殿を世にたていかめしく見ばやとのみ思ひくらし、仏法の事は外の事に聞なし、＊むなしくなりて頼べき功徳も善根も＊あらばこそ死しては直に地ごくにおもむき、＊つるぎの山をこえ、＊あかがねの湯につき入られ、しばしのあひだもくるしみのやすかなる事なし。汝は二たび人間に帰るときく。わが跡よく〳〵とふらへやと、いひもはてぬにおそろしき＊獄卒、その母を引たて、つれてゆく〳〵。泣さけぶ声はるかに聞えしかば、甚五郎悲しさ身にあまりて涙のおつる事雨の如し。琰王仰られけるやう、汝よく見て帰り、その跡とふ事をわするべからず。とく〳〵帰れと仰ける所に、＊もろ〳〵の鳥けだものきたりあつまりて、甚五郎を目がけて懸りけるを琰王のたまはく、＊娑婆に帰らば汝等がために功徳をいとなみ皆人間に生をうくべし。はやくゆるして帰せやとあり。もろ〳〵の鳥けだものはみなしりぞくに、あかく＊斑なる狗ひとつ残りて甚五郎が衣をくひとめて放たず。いかにと問給ふに、こたへて申すやう、我業因つたなくして狗と生れ此家にとらへられたり。甚五郎は軍のいとまには鵜鷹のあそびに日ををくり鷹のために我をく、りてさらばころしもやらず。股の皮を剥かけて用ひるにしたがひて＊切鐓て鷹の餌にせらる。その痛くるしむ事心もことの葉も絶て誰に訴べきたよりもなく、悲しき中に死けるはいつの世にわするべき。そのうらみをほうぜんためなりといふ。琰王さま〳〵なだめて＊司命に仰て帰し給ふ。

路にして＊忍の＊長七とて、この程敵にうたれし傍輩に逢たり。長七すでに甚五郎が袖をひかへて、我は只今地ごくにおもむくなり。我が父母に跡とふらひて給はれと言伝せしと届てたべといふ。いかに届け侍べるとも、しるしなくてはまことしからずやと云ければ、腰より、ひとつの＊かうがいを取出し、これをしるしにとて、なく〳〵わかれけり。送りける司命のをしへけるやう、たとひとふらひのため経をうつし仏をつくりても、非道に得たる金銀にていたしてはさらに亡者の功徳に成がたし。その亡者の秘蔵に思ひし物こそたしかにはとゞけとぞかたりける。甚五郎道にす、み大なる穴に行か、り、此中に落るとおぼえてよみがへり、忍がことづてたりし、かうがいは手にあり。その家につかはしければ、長七うたれし、その＊かばねを＊はうふりし時に棺に入て送りし物なり。何のうたがひなしとて、父母なく〳〵とぶらひくやうをいたしけり。

甚五郎は今は出家の身とならばやと、つら〳〵打案する中に、弓やとる身の習ひ、か、る世の乱れをうしろになし独りのがる、は、君のためには不忠となり、親のためには家をうしなふの不孝の子なり。＊天神地祇もさこそはにくみ給ひ世上の人にも笑はれ恥かしめを死後までも名をさらすなるべしや。さりながら＊恩をすて、無為に入をばまことのほうをんなりと仏もとき給へば、世の望みを忘れ欲をはなれ＊抖薮行脚の身とならば、人も思ひゆるし君も捨給ふ習ひ也。させる所帯もなく妻子もなき我なり。髻に何の心をか残すべき。後世こそ大事なれ、とかくの事は用なしとて、さまを替て家を出つ、諸国をめぐる修行者とぞ成にける。

狗波利子巻一終

○**長尾謙信**　戦国時代の武将。享禄三年（一五三〇）～天正六年（一五七八）。越後国の大名。天文十二年（一五四三）、謀反鎮圧のため栃尾城に入城し、中越地方を平定。　○**家老**　武家の家臣で最重職。　○**北条丹後守**　北条（きたじょう）高広（生没年不詳）、または子の景広（生年不詳～天正七年（一五七九））。越後国刈羽郡佐橋庄北条（現新潟県柏崎市）を本領とする。天文二十三年（一五五四）、高広は謙信に背き甲斐国武田信玄に内応、甲斐・越後の対立が決定的となった。後敗れて謙信へ帰参した。永禄六年（一五六三）から景広とともに上州厩橋城（現群馬県前橋市）に在城した。　○**越後の国橡生の城代**　越後国古志郡（現新潟県栃尾市）栃尾城か。高広は永禄六年（一五六三）上野国厩橋城の城代に抜擢される。天正六年（一五七八）に御館の乱が勃発すると、御館救援の準備のため景広は本拠地北条城へ移った。『北越軍談』二十六には、「北条丹後守長国（注…高広の誤り）厩橋の城代に補せられ、二千貫文の分限と成れり。…長国が父安芸守長朝は越後刈羽郡北条の所士にして、長尾家譜代の郎従たり。輝虎公古志の山家に放逐せられ玉し時、長朝殊に看養を加へまいらせ、打続て忠勤更々怠なきに依て、古志郡栃尾の城代に補せられ、其後関東の総軍人として那波城を守り、謙忠が介副を勤む。され共衰老軍事に倦（とど）が故、骸骨を乞て、先年栃尾へ帰り、職事を丹後守に与奪す」とある。　○**城代**　城主の代理として統轄した家臣の長。○**大剛の名あり**　きわめて強いこと。「ダイカゥ Daicō」（日葡辞書）。『北越軍談』二十六には「長国（注…高広の誤り）器量骨幹人に倍して無双の勇士なれば、公も秘蔵に思食れ、等閑なき機利者たりし」とある。　○**甚五郎**　『北越軍談』二十六に「丹後守未だ弥五郎と号し、若武者たりし時」とあるが、そこからとるか。　○**勇士**　強い男。「ユゥシ Yūxi」「ユゥジ Yūji」（日葡）。　○**天正元年**　一五七三年。武田信玄没。　○**平生**「ヘイゼイ Feizei」（日葡）。「論語ノ注ニ平生（ヘイセイ）ハ少時（ワカシ）時也ト云ヘリ」（『塵添壒嚢鈔』一―十九）。　○**琰魔王界**　地獄にある閻魔王の住む宮殿。「琰魔　エンマ」（撮壊集）。　○**大王**　閻魔大王。冥土で亡者の罪を裁判しそれによって賞罰をあたえるという十王の一人。　○**寿の算**　天から与えられている命。算は区切りとなる一定の数の意。「寿　イノチ」（明応五年本・易林本）。　○**司録**　司録記神。閻魔王の十王庁に所属する候官。また星の名。　○**手かせ**　手にはめて自由を奪う刑具。「てかし」とも。「長サ一尺六寸、厚一寸、木ヲ以テ之為ル」（『和漢三才図会』二十二）。「地獄ノ罪人ノ十王の廟ニ渡サレテ頸械手杻ヲ入レラレ」（『太平記』二）。　○**首かせ**　罪人の首にはめて自由を奪う刑具。「くびかし」とも。「長五尺五寸、頭濶カ一尺五寸。木ヲ以テ之ヲ為。…蓋シ旧ハ長短有テ而軽重無」（『和漢三才図会』二十二）。　○**物のぐ**　武具。兵具。「兵器　モノ、グ　武具　同　又一物具ニ」（書言字考）。　○**むなしくなりて**　死んで。　○**あらば**　正しくは「あらねば」。　○**つるぎの山をこえ**　地獄にあるという剣に覆われた山。「刀山　ツルギノヤマ　又云刀林地獄」（書言字考）。○**あかがねの湯につき入られ**　「地獄共ヲ見セシメ給ニ。空ニハ大火焔燃アガリ。下ニハ銅（アカガネ）ノ湯湧返リ。…山ニ向テ逃レハ。則剣ノ山ナレハ。肉ヲトヲシテ。紅蓮ノ如シ」（『塵添壒嚢鈔』十七）。「かの河の中に熱き赤銅の汁ありて、かの罪人を漂はす」（『往生要集』衆合地獄）　○**獄卒**　地獄で亡者を責め立てるいう鬼。「獄卒　ゴクソッ　世ニ云地獄ノ悪鬼」（書言字考）。「ゴクソッ Gocusot」（日葡）。　○**もろ〳〵の鳥けだものきたりあつまり**　「極悪の獄鬼、并に熱鉄の師子・虎・狼等のもろもろの獣、鳥・鷲等の鳥、競ひ来りて食ひ噉む」（『往生要集』衆合地獄）に、類似するか。　○**婆婆**　この世。　○**斑なる狗**　振り仮名「きたら」は「またら」の誤刻。『往生要集』（絵入り、寛文三年刊）挿絵には斑の犬が描かれている。　○**切鍛て**　「鍛　ソグ」（『倭国篇』慶長十五年版）。　○**司命**　司命令神。司録とともに閻魔王の脇へ控える。なお、道教においては、天界にあって人の寿命をつかさどる神。「事ノ軽重ニ随ヒ、司命ソノ算紀ヲ奪フ。算尽キレバ則チ死ス」（『抱朴子』微旨篇）。また人の寿命をつかさどるという星。「司命星」。　○**忍**　武蔵国埼玉郡忍（現埼玉県行田市）。延徳三年（一四九一）成田親泰築城の忍城がある。　○**長七**　忍城城主成田長泰からとるか。　○**かうがい**　「笄」「簪」「釵」「髪掻」「梗概」「搔枝」（諸節用集）。①髪を整える細長い道具。男女ともに用いる。②刀の鞘の付属品。刀の差表に差しておき、髪をとりつくろうのに用いる。敵に討たれた長七の場合は②か。

○かばね　死骸。　○はうふり　「葬　ハウフル也」（夢梅本『倭国篇』）。「葬ハウフル　荼毘」（伊京本・易林本）　○天神地祇　天上にいる神と大地の神。「あまつかみ」と「くにつかみ」。「天神地祇　テンジンヂギ　左伝正義天在ヲ神ト曰、地ニ在ヲ祇ト曰」（書言字考）。　○恩をすてゝ無為に入をばまことのほうおんなり　「棄恩入無為」。さとり。因縁によって作られたものではなく、生滅変化を離れたもの。「棄恩入無為こそ其の孝と有をや」（『地蔵菩薩霊験記』五－七）。　○抖薮　衣食住に対する煩悩をうちはらうこと。身を修行すること。「抖薮　トソウ」（伊京本・文明本・易林本）。

【余説】挿絵は『往生要集』（絵入り）等に見える地獄の描写の常套。

本話では北条を「ほうじょう」としているが、実際には「きたじょう」とするのが正しい。小田原の北条と混乱したためか。また、北条を栃尾城主とするのは、管見の範囲では『北越軍談』のみなのだが、「栃尾」と「橡生」など、曖昧さが残る。

本話の鷹の餌に狗を殺す咄は、『可笑記』巻二に見え、了意の『可笑記評判』巻四・十二にも収録される。また、『可笑記評判』にも引用されるのだが、『徒然草』百二十八段に雅房大納言、『戒殺物語　放生物語』に唐の遂安公を主人公とする類話がある。

【類話】『太平記』二十「結城入道堕地獄事」、『剪燈余話』一－四「何思明遊酆都録」、『冥詳記』「趙泰」（『太平広記』三七七）〈富士1〉。

『伽婢子』四－一「地獄をみて蘇」、『狗張子』四－二「田上の雪地蔵付明阿僧都、冥土に趣くこと」、『法苑珠林』袁廓〈富士2〉。

『法苑珠林』袁廓は、地獄の描写にとどまり、本話の如き地獄を巡って生き返るという構想の直接的な典拠とは言い難い。